

【研究ノート】

遠江の無袖横穴式石室と埋葬に関する検討

田村 隆太郎

要旨 筆者は前号（田村 2016b）において、駿河東部の6世紀代の横穴式石室を対象として、床面や副葬品等の出土状況を分析し、石室内における埋葬等の利用状況について検討した。駿河東部の横穴式石室は無袖の形態に限られるが、間仕切石や礫敷きの違いによって奥側と前側を区別している場合が多く認められ、利用状況も異なることから、埋葬上の機能と関連した石室空間の区分が広く普及していた可能性を考えた。また、2体が隣接して埋葬されている場合があること、頭位を前方に向ける場合があることなども確認した。

本稿では、遠江の6世紀代の無袖の横穴式石室を対象として、同様の検討を行った。残存の良い資料が少なく課題も多く残したが、埋葬主体や副葬品の配置に駿河東部と共通した状況が指摘できる一方、空間区分の表示が不明瞭であり、土器群の副葬に影響している可能性などを示すことができた。

キーワード：古墳時代後期 遠江 無袖の横穴式石室 埋葬 副葬 磕床 石室空間の区分

1 はじめに

無袖の横穴式石室 遠江では、6世紀前葉（註1）に横穴式石室の導入が認められ、その後、多様な形態の横穴式石室が展開する。そのなかには無袖の横穴式石室もあり、定形化したものは6世紀後葉以降の群集墳に多く導入されている。無袖の横穴式石室は比較的下位の階層に評価されるが、豊穴系横口式石室などの系譜関係のほか、三河の影響による擬似両袖式石室との連動性、玄門立柱石や石室外の石積み入口構造にみる他形態との融合などの評価が注目される。

以上は、鈴木敏則の形態分類と変遷の研究（鈴木敏1988）、鈴木一有の各形態の系譜と展開を示した研究（鈴木一2000）によるところが大きい。また、各地域の検討や無袖の横穴式石室に関する検討も進められてきた（静岡県考古学会2003、田村2010）。

埋葬に関する検討 筆者は、無袖のみが展開する特徴的な駿河東部の横穴式石室について、床面や副葬品等の出土状況から、石室空間内における埋葬等の利用状況について検討した（田村2016b）。

その結果、石室の奥から2~3mまでを間仕切石や礫敷きの違いによって区分し、奥側は埋葬主体とそれに近い品々の配置、前側は奥への出入りと被葬者から離れた土器等の配置に利用する傾向がうかがえた（註2）。また、1~2人目の埋葬主体が隣接する場合や頭位を前方に向ける場合があることも

確認した（図1）。

駿河東部においては、横穴式石室の導入当初から埋葬機能に関連した空間区分があり、広く普及していた可能性が指摘できる。ただし、その系譜や導入経緯については、他地域との比較検討なども必要になる。

2 目的と方法

前述の諸経緯から、本稿では遠江に分布する無袖の横穴式石室を対象として、埋葬方法と石室空間の構造、埋葬時の空間利用の状況について確認したい。

検討の方法は、駿河東部における検討（田村2016b）と同様に、横穴式石室が出現してから広く群集墳に導入される6世紀代を対象として、主に石室内の区分と埋葬主体の位置、副葬品の配置に注目する。ただし、遠江では石室床面および副葬品等の状況が良好に把握

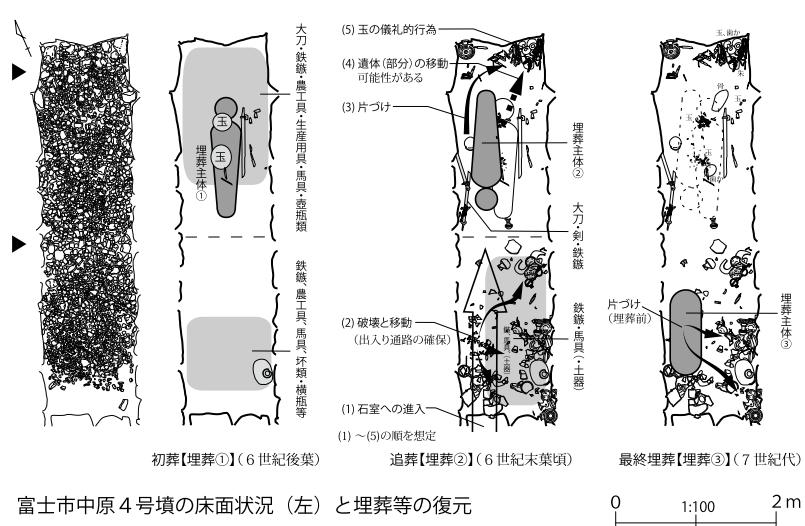


図1 駿河東部の横穴式石室と埋葬等に関する例

できる古墳が少ないとことから、残存の悪い古墳も含めて概観することとする。なお、地形および古墳分布の違いから牧之原台地以東（大井川流域）は除く（図2）。

3 各古墳の状況

（1）6世紀前葉～中葉

遠江において、6世紀前葉～中葉は横穴式石室が出現する時期にあたる。無袖の横穴式石室は、横穴群地帯である東遠江を除く範囲に分布するが、点在しており、石室形態もそれぞれ異なる特徴をもつ。これらは、群集墳において定形化する前の段階として把握することができ、その中には積石塚との関連が考慮される古墳もある。

天神山3号墳（図3、湖西市1983） 径約10mの円墳であり、盛土中に多くの割石が混在する。約4.6×0.8m（註3）の横穴式石室を埋葬施設とし、前寄りに竪穴系横口式石室の特徴である段構造を備える。床面について、奥寄りは盜掘により失われているようであるが、その他は概ね全面に礫床が認められる。石室内の区分を示すような礫の違いなどは把握できない。一方、側壁の基底石の置き方に奥半部と前半部の違いを認めることができる。

副葬品等の残存は非常に悪く、埋葬主体の位置や姿勢、副葬品配置は復元できない。一方、段構造に面した範囲に須恵器の壺類6点と高壺、壺が検出されてお

り、石室前寄りにおける壺類主体の副葬土器群を認めることができる。なお、石室外からも須恵器の壺類14点を含む土器が出土している。

辺田平12号墳（図3、浜北市2000） 径約7mの円墳であり、約3.3×0.7mの埋葬施設をもつ。この一帯には5世紀から続く積石塚群があり、12号墳の埋葬施設も円礫を多用した竪穴系埋葬施設と同じ系譜にあると判断できるが、一方の小口に横口の構造を指摘することができる。床面は、閉塞部分を除く全体に礫床が認められる。

石室内から玉類と鉄刀、鉄鎌、刀子が出土しているが、攪乱からの出土である。土器は、須恵器の壺類3点が石室外から出土している。埋葬施設の規模からみても土器の副葬は認め難い。

上神増E古墳群（図3、静岡県埋2010） 7号墳と10号墳について、いずれも径10m強の円墳であり、埋葬施設は横口構造を伴う石室の可能性が指摘できる。ただし、両古墳の埋葬施設の特徴は異にしている。残存状態が悪く、礫床などの状況は把握し難い。

7号墳では、石室奥寄りに玉類、中央前寄りに鉄鎌の出土があり、頭位を奥に向かって埋葬主体が推測できる。石室覆土から須恵器の壺の破片が出土しているが、副葬されたものかは判断できない。石室外では須恵器の壺類8点と短頸壺、提瓶2点が出土している。10号墳では、石室覆土から玉類と須恵器の壺蓋1点、高壺

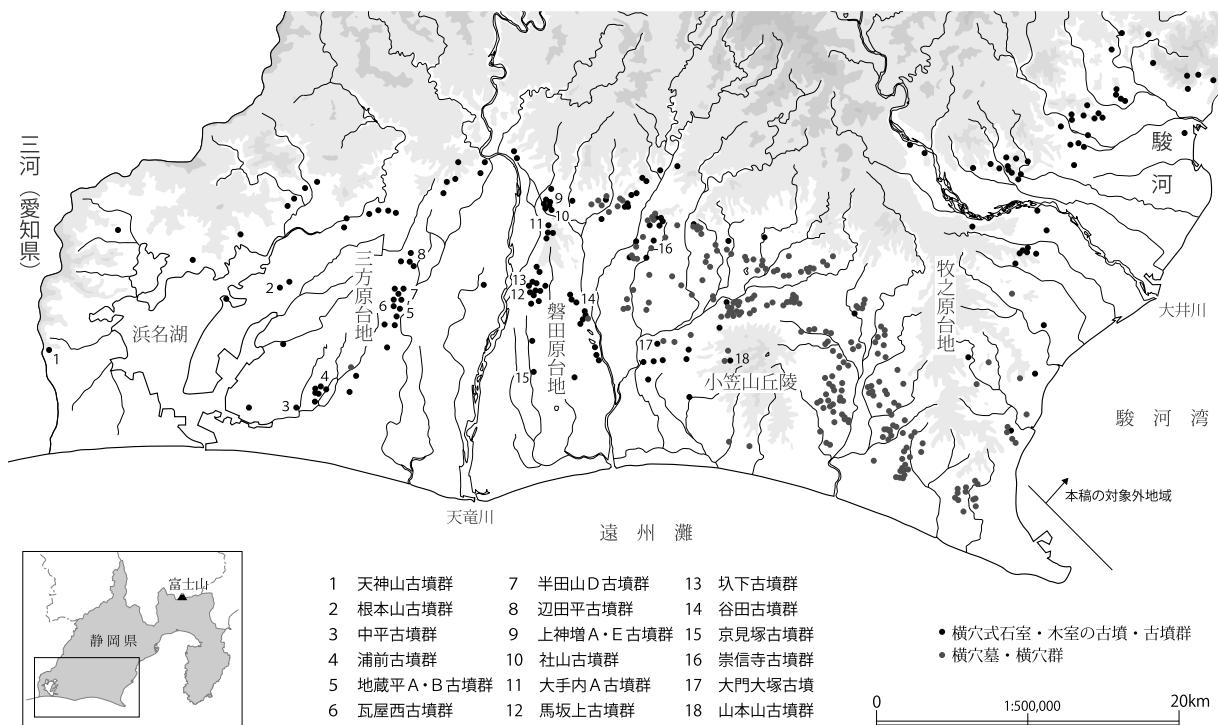


図2 対象古墳の位置

1点が出土しているが、埋葬主体の姿勢や副葬状況は復元できない。石室外から須恵器の壺類7点と高环、趨の出土がある。

崇信寺10号墳（図3、森町1996） 径22mの円墳であり、約5.0×1.2mの横穴式石室を埋葬施設とする。短小の入口構造が左片袖の位置に付き、段構造を伴う。礫床は、奥から約3.5mまでの範囲に検出され、前寄り約1.5mは疎らになるが、境界は不明瞭である。礫床内における区分等は把握できない。

礫床範囲の中央部において、右側に刀剣があり、切

先を前方に向いていることから、頭位を奥に向けた埋葬主体があった可能性が指摘できる。調査報告では盗掘の可能性も指摘されているが、鉄鎌や金銅装馬具、玉類が礫床前寄りを中心に散在した状態で出土している。土器は、石室上からの破片の出土に限られる。

大門大塚古墳（図3、袋井市1987） 径26mの円墳であり、約3.8×1.6mの横穴式石室を埋葬施設とする。河原石を多用した赤彩のある石室であり、無袖で床面が開口方向に上がる可能性も指摘されている。しかし、破壊などが著しく、形態や構造の詳細は判断し難い部

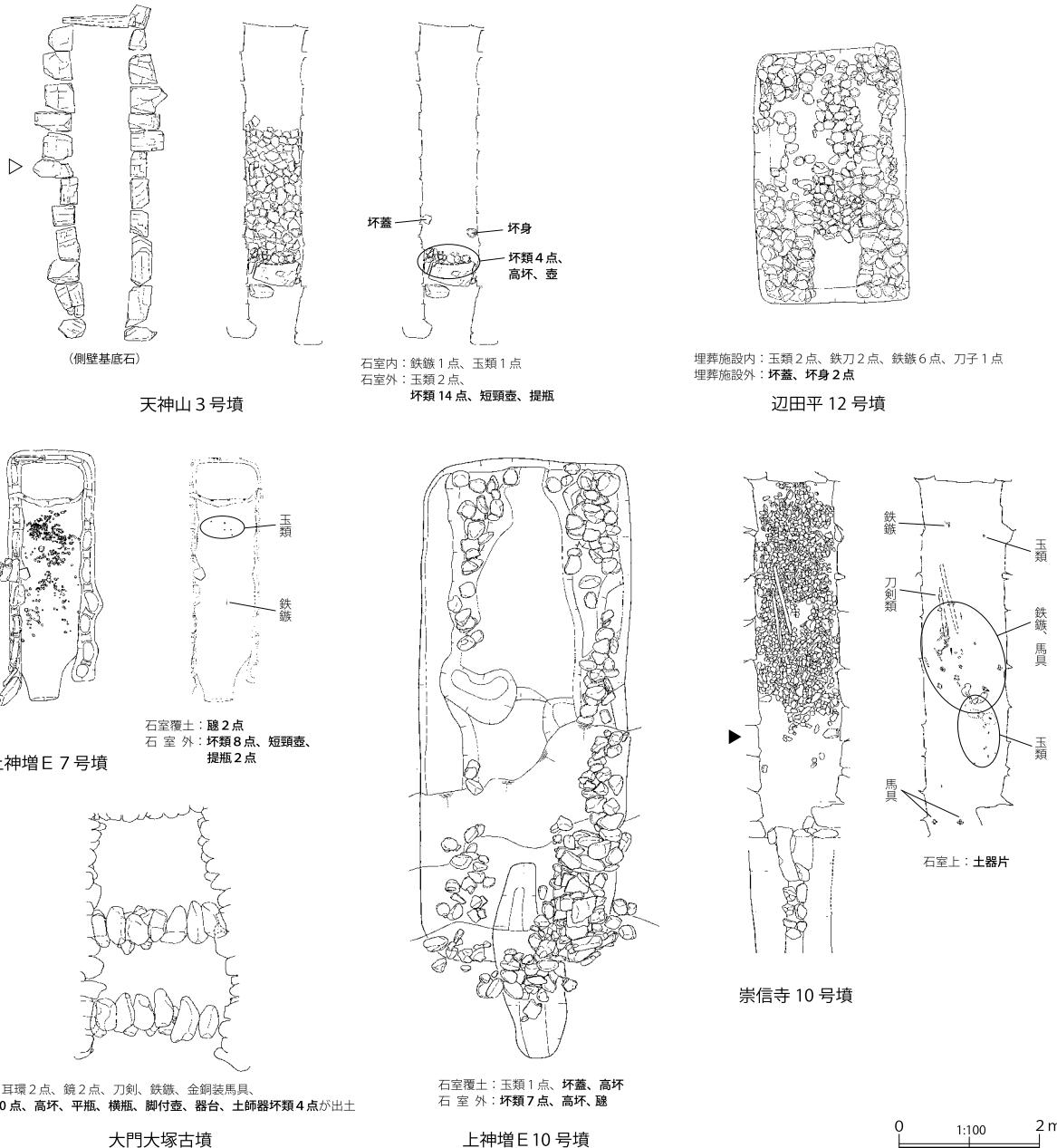


図3 各古墳の状況1

分が多い。

金銅装馬具や刀剣、空玉やトンボ玉などの玉類のほか、器台を含む多くの土器が出土している。しかし、出土位置の詳細は不明である。

(2) 6世紀後葉～末葉

遠江において6世紀後葉～末葉は、群集墳の形成が認められ、横穴式石室が広く採用される時期にあたる。片袖式、両袖式、擬似両袖式のほかに無袖式の横穴式石室があるが、無袖式は規模が小さく、墳丘や副葬品の内容からみても比較的下位の階層に位置づけられる傾向にある。ただし、群集墳内の位置において、常に他形態の古墳に従属するものとして存在したわけではなく、単位群ごとに採用される石室形態の一つとして無袖式の系譜が存在していたことがわかる。

なお、平面形が胴張りになるものや玄門に立柱石を設けたものなど、擬似両袖式との関係がうかがえる石室があるほか、羨道とは異なる幅狭短小の入口構造（天井のない石積み入口構造）をもつ石室もある。

ア 浜名湖東岸・佐鳴湖西岸

根本山A4号墳（図4、静岡県教1968）径約12mの円墳であり、約7.9×1.6mの横穴式石室を埋葬施設とする。ただし、閉塞部分（前寄り約2m分）の側壁は底面が高くなり、小さな石が用いられていることから、石室に付属する入口構造である可能性も考慮される。床面について、礫床は奥から約3.8mまでを範囲とし、その前方に閉塞石まで約1.3mの間がある。さらに、礫床内において、前寄り0.9m付近を境にした礫の大小の違いを把握することができる。なお、礫床前端付近の左側壁において、2段目の石が縦に積み置かれている。

礫床の奥寄りから鉄刀片、刀子、鉄鏃と玉類の出土がある一方、中央よりやや前寄りに耳環2点が出土している。耳環の出土位置から、初葬もしくは追葬において頭位を前にした埋葬が行われた可能性も考慮される。ただし、副葬品の出土状況は散在的であり、後世の搅乱が把握できることから、埋葬時から大きく移動している可能性も否定はできない。

土器については、前端部右隅に須恵器の壺蓋2点、甕1点、提瓶1点が副葬されている。礫床のある奥側に埋葬主体等を配置し、礫床のない前端部には儀礼に用いた土器を配置した可能性が指摘できる。

根本山E3号墳（図4、浜松市文1988）径約12m

の円墳であり、約5.0×1.4mの横穴式石室を埋葬施設とする。礫床は奥から約4.3mまでを範囲とし、その前方に閉塞石まで約0.7mの間がある。礫床内における区分は把握できない。

副葬品の出土は後世の搅乱を受けた散在的なものであり、埋葬主体の姿勢や副葬品配置の詳細を復元することは難しい。土器について、石室内では壺の小破片が出土しただけである。周溝などの石室外からは、須恵器の壺類7点以上と高壺、壺などのほか、土師器の高壺や甕が出土している。

中平古墳群（図4、浜松市教1982）6号墳と7号墳をあげることができるが、いずれも墳丘は残存せず、埋葬施設の残りも悪い。6号墳の横穴式石室は、約6.5×1.7mと長大である。側壁がほとんど残っていないために判断し難いが、擬似両袖式の可能性も指摘できる。7号墳は約4.5×1.6mの横穴式石室を埋葬施設とする。いずれの石室も礫床が検出されており、前寄り1m前後の範囲を除いて施した可能性が指摘できる。

玉類や鉄製品は、石室覆土中から散在した状態で出土している。出土位置の詳細も不明のため、埋葬主体の姿勢や副葬品配置は復元できない。土器について、6号墳の石室覆土や7号墳の墓道覆土から須恵器片や土師器片が出土しているが、石室内に副葬されていたかは不明である。いずれの古墳においても、周溝などの石室外から須恵器の壺類多数と壺瓶類などが出土している。

浦前III1号墳（図4、浜松市文1992a）径約10mの円墳であり、約5.0×1.3mの横穴式石室を埋葬施設とする。規模は大きくなが、側壁の残存がなく、擬似両袖式であった可能性も考慮する必要がある。礫床は主に石室奥半の約2.5mの範囲に検出されているが、前半部にも若干の検出があり、本来の礫床範囲を断定することは難しい。

礫床が残る奥半部において、奥寄りに玉類、奥から中央部に耳環4点、前寄り左右それぞれに刀子、両頭金具が出土している。鉄鏃は各所に散在し、鉄刀は破片の出土である。耳環や刀子の出土状況から左右に隣接する埋葬主体があった可能性も考慮されるが、後世の搅乱が大きいことから評価し難い。土器は、石室内では小破片のみの出土であり、石室外から壺類と壺が出土している。

イ 三方原台地東縁部

地蔵平A・B古墳群（図5、浜松市文1992b） A 11

号墳とB 1号墳が該当し、A 62号墳も無袖の可能性がある。いずれも径10m前後の円墳である。A 11号墳は約4.0×1.1m、B 1号墳は約2.9×1.0mの横穴式石室を埋葬施設とする。残存状態は良くないが、床面の大半に礫床が施されたことがわかる。A 62号墳も径約12mの円墳であるが、約5.0×1.3mの長い横穴式石室

を埋葬施設とする。床面は中央奥寄りが大きく失われているが、その他は全体に礫床が検出されている。

玉類や鉄製品の出土は搅乱された状態であり、出土位置の詳細も不明のため、埋葬主体の姿勢や副葬品配置の復元は難しい。B 1号墳とA 62号墳の石室内から土器も出土しているが、状況は同様である。一方、

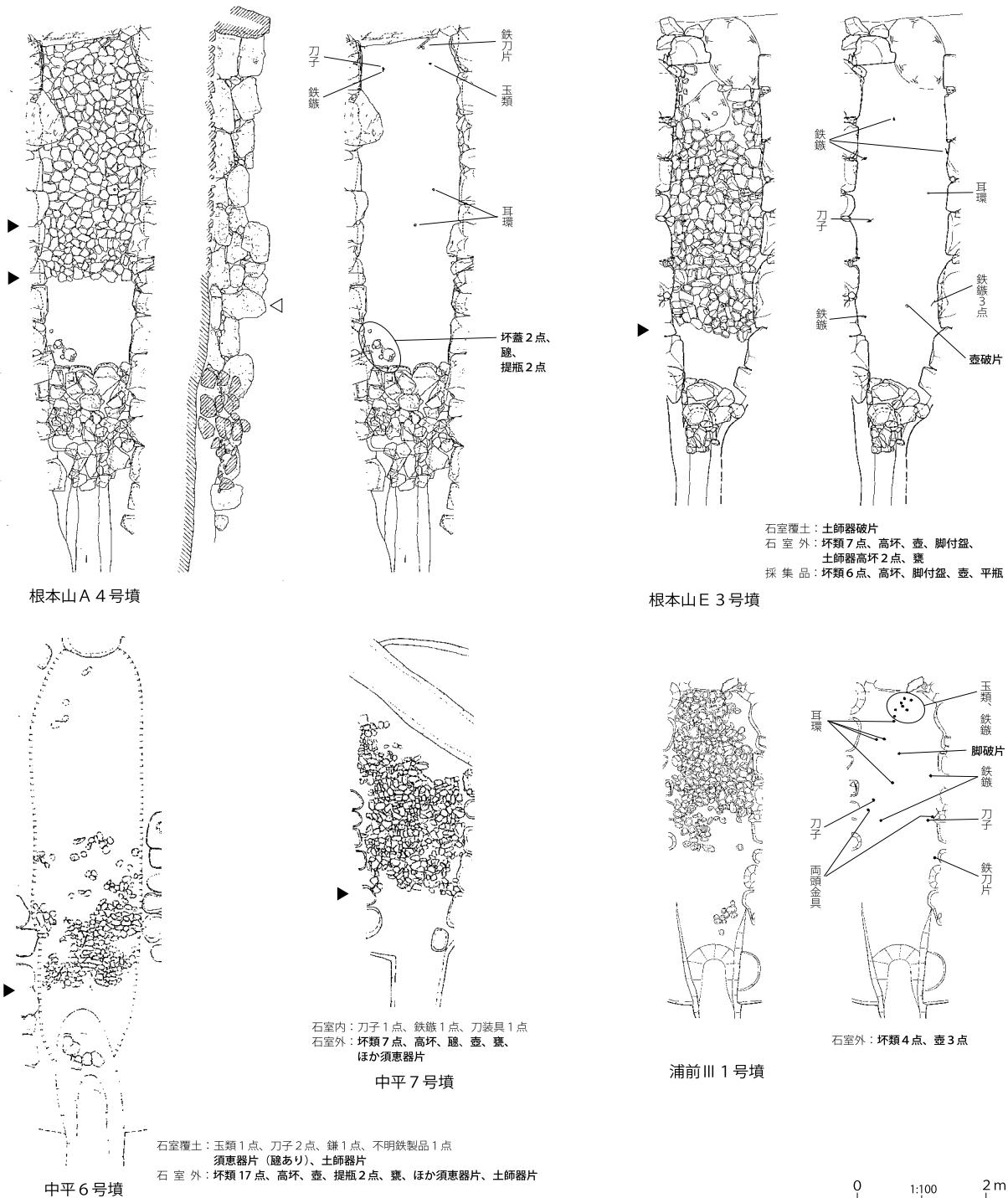


図4 各古墳の状況2

各古墳の墓道や周溝からは、須恵器の壺類多数と壺などが出土している。

瓦屋西B 4号墳（図5、浜松市教1991） 径約9mの円墳であり、約4.1×1.3mの横穴式石室を埋葬施設とする。残存は良くないが、礫床が全体に施された状況が把握できる。礫床内の区分は把握できない。

石室奥部に玉類が分布し、前寄り左右両側に鉄鏃や刀装具などが出土している。鉄製品を中心に搅乱などによる乱れも指摘できるが、玉類の出土分布から頭位を奥に向かた埋葬主体があった可能性が考慮される。

さらに、石室前端の左側に須恵器の壺身1点と壺蓋1点が出土しており、土器の副葬状態を確認することができる。なお、墓道や周溝などの石室外からは、壺類や高壺などと土師器の甕が出土している。

瓦屋西C 6号墳（図5、浜松市文1991） 径約10mの円墳であり、約4.6×1.0mの横穴式石室を埋葬施設とする。胴張りが明確な平面形と玄門立柱石の存在が特徴的である。しかし、全体的に石室の残存は悪い。礫床はほとんど検出されていない。

石室前端部から鉄刀片や鎌、鉄鏃、馬具が出土して

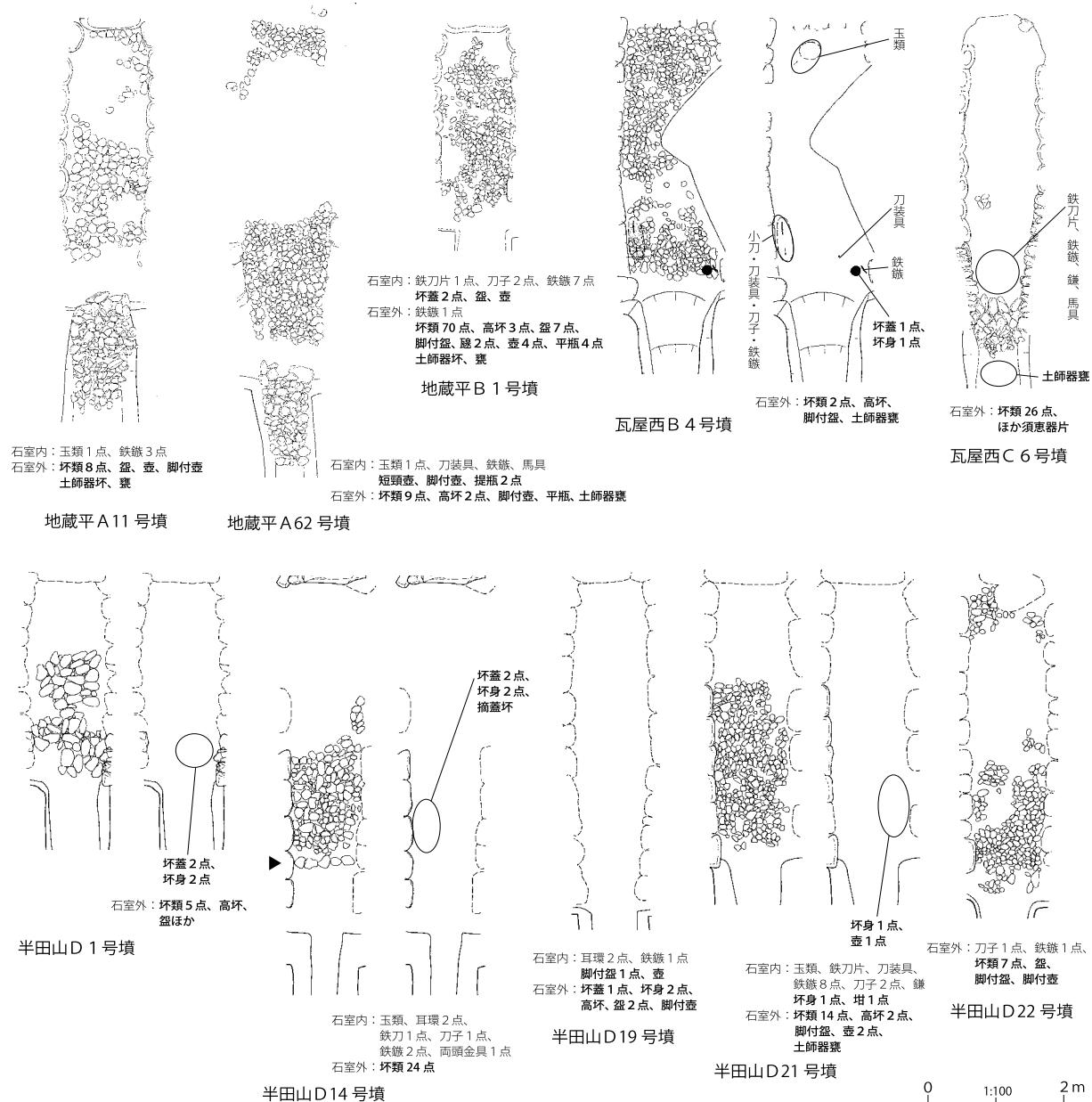


図5 各古墳の状況3

いる。土器は、閉塞石の外側から土師器の甕、墓道や周溝から須恵器の壺類26点などが出土している。

半田山D古墳群（図5、浜松市教1988） 1号墳、14号墳、19号墳、21号墳、22号墳が該当する。径10～12mの円墳であり、長さ3～5m、幅1m強の横穴式石室を埋葬施設とする。いずれの石室も床面を含めて搅乱が著しい。14号墳では、前寄り1m付近に大きな礫が並び、その奥側に礫床を施した状況が指摘できる。一方、1号墳や21号墳、22号墳では、石室前端部付近にまで礫床が及んでいる。

副葬品の出土は搅乱された状態であり、出土位置の詳細も不明のため、埋葬主体の姿勢や副葬品配置の復元は難しい。1号墳や14号墳、21号墳の石室前寄りからは、須恵器の壺類などが出土している。ただし、14

号墳と21号墳については、追葬に伴う可能性が指摘できる。19号墳の石室内からも土器の出土があるが、出土位置の詳細は不明である。一方、各古墳の石室外からは、須恵器の壺類多数などが出土している。

ウ 磐田原台地北部

上神増A 5号墳（図6、静岡県埋2010） 中期古墳である径14mの円墳の墳丘に、約4.5×1.4mの横穴式石室が構築されている。残存状態が非常に悪いが、後述の大手内A 6号墳に類似した形態であった可能性が指摘できる。床面は、概ね全体に板石を敷いていた状況が把握できる。奥から約2.4mを境にして、板石の大きさが異なっているが、明確な区分であったかは判断し難い。

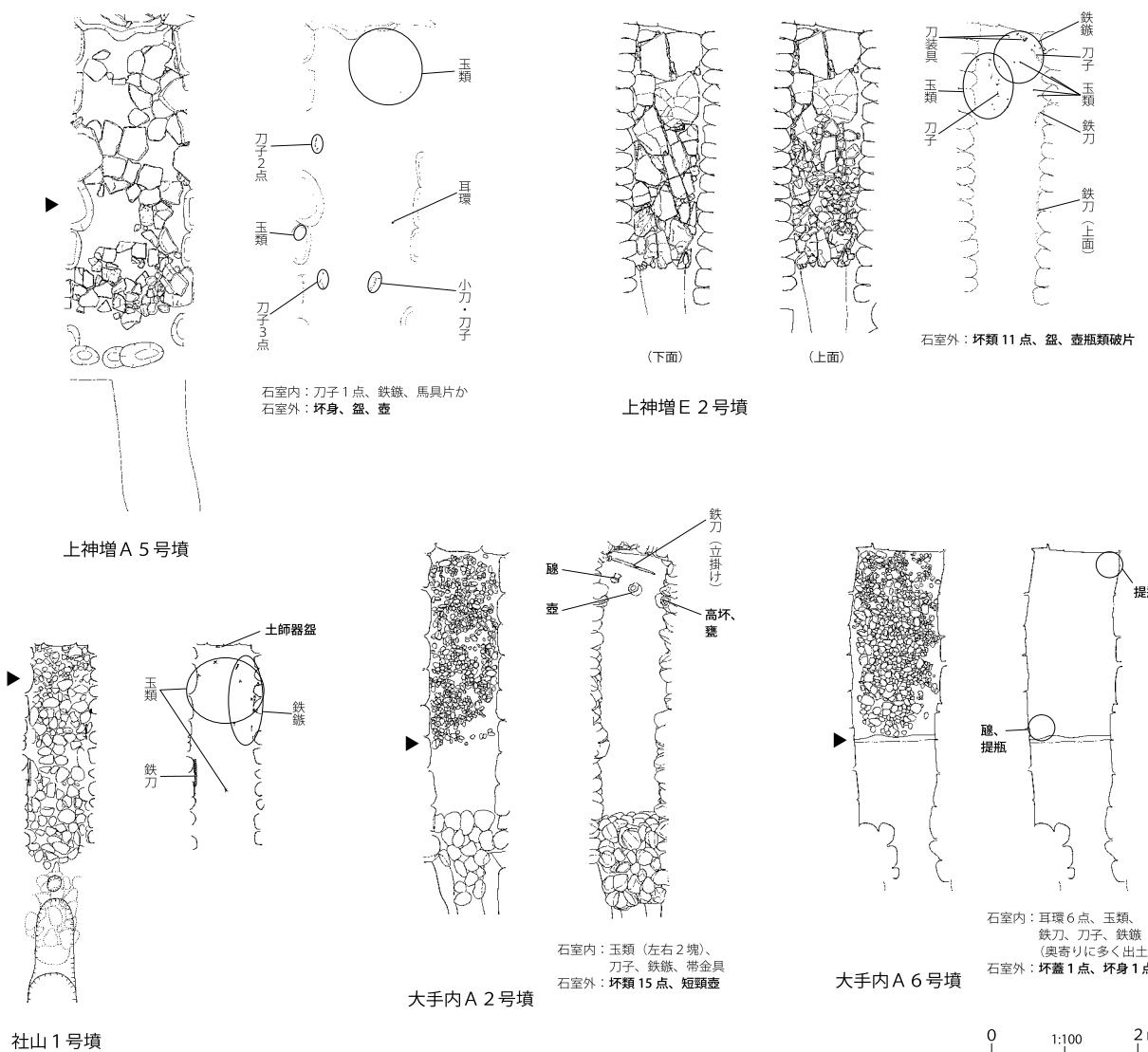


図6 各古墳の状況4

副葬品の多くは、攪乱により散在した状態で出土している。しかし、石室奥寄りの玉類の分布については、埋葬時の位置を反映している可能性もあり、石室奥半部に頭位を奥に向かた埋葬主体があったと推測できる。土器については、墓道から須恵器の壺身や壺などの破片が出土しているのみである。

上神増E 2号墳（図6、静岡県埋2010） 径約12mの円墳であり、約3.8×1.0mの横穴式石室を埋葬施設とする。地割れによって石室が大きく崩壊していたが、盗掘や人為的な破壊は認められなかった。床面は2面あり、下面是閉塞部分を除く全体に板石が敷かれ、上面は石室中央から前半部に礫床が施されている。板石について、前寄りに比べて奥寄りの方が大きい石を用いている。上神増A 5号墳と共に通する特徴ではあるが、その境界は明確なものではない。

下面では、奥半部に多くの副葬品が出土している。左奥隅付近を中心に多くの鉄鏃や刀装具、刀子、その前方右側を中心に多くの玉類と刀子が出土している。左側には切先を前に向けた鉄刀があり、石室奥半部に頭位を奥に向かた埋葬主体を推測することができる。また、副葬品は全体的に乱されたような出土状況にあり、追葬時の片づけなどの影響も考慮される。下面において複数の埋葬があった可能性も否定はできない。

上面においては、石室前寄りの左側に切先を奥に向かた鉄刀が出土している。刀剣類は被葬者の傍らに置かれることが多いことから、石室前半部に追葬の埋葬主体があり、頭位を前方に向けていた可能性が指摘できる。

土器は石室内からの出土ではなく、墓道などから須恵器の壺類11点や壺瓶類などが出土している。

社山1号墳（図6、豊岡村1983） 径約9mの円墳であり、約3.9×0.9mの横穴式石室を埋葬施設とする。床面は全体に礫床が検出されているが、奥から約0.5mまでの範囲には小さい礫が用いられている。

石室奥部には土師器の盤、その前方に玉類の分布、中央部の右側には切先を前方に向けた鉄刀、左右両側などに鉄鏃が出土している。埋葬主体の数は判断し難いが、頭位を奥に向かた埋葬主体の存在を指摘することができる。

大手内A 2号墳（図6、豊岡村2000） 径約11mの円墳であり、約4.2×0.9mの横穴式石室を埋葬施設とする。床面は、奥から約2.6mまでの範囲に礫床があり、礫床範囲の前方には閉塞石まで約1mの間がある。礫床内の区分は把握できない。

石室奥部に鉄刀が立て掛けられており、その前方に須恵器の高杯、憩、壺、甕が出土している。鉄鏃や刀子の出土もある。玉類が左右2箇所にかたまって分布することが報告されており、左右2つの埋葬主体があつた可能性を指摘することもできる。なお、周溝等の石室外からは、須恵器の壺類15点と短頸壺が出土している。

大手内A 6号墳（図6、豊岡村2000） 中期古墳である一辺約19mの方墳の墳丘に、約3.8×1.2mの横穴式石室が構築されている。この石室には、右片袖の状態に幅狭短小の入口構造が付く。床面は、奥から約2.6mまでの範囲に礫床があり、その前方には約1.2mの間がある。なお、左側壁の基底石の高さも同じ位置で変化している。礫床内に明確な区分は把握できないが、前寄りに大きめな礫が比較的多い。

石室内から耳環6点や玉類、鉄刀、刀子、鉄鏃が出土しているが、出土位置の詳細は明らかではない。礫床範囲の左奥隅から須恵器の提瓶1点、右前隅から須恵器の憩1点と提瓶1点が出土している。右前隅の土器については、追葬に伴う可能性が指摘できる。耳環の数からみても複数の埋葬があったことは明らかであるが、埋葬主体の姿勢や副葬品配置の詳細は復元し難い。なお、墓道からは須恵器の壺蓋1点と壺身1点が出土している。

エ 磐田原台地中南部

馬坂上16号墳（図7、磐田市1998） 径約11mの円墳であり、約5.0×1.2mの横穴式石室を埋葬施設する。この石室には、右片袖の状態に幅狭短小の入口構造が付く。床面について、掲載した図は昭和45年の第2次調査の状況であり、昭和35年の第1次調査では全体に礫床が認められている。礫床内の区分は把握できない。

石室奥寄りから、玉類や鉄製品が出土している。土器は、石室奥部から須恵器の提瓶2点、中央付近から須恵器の壺類7点や壺など、前端部から須恵器の壺蓋1点、壺身1点、提瓶1点が出土している。玉類などの出土分布によって、少なくとも奥半部に埋葬主体があつた可能性が考えられる。なお、石室中央の土器群がある位置の両側壁において、基底石の大きさに変化が認められる。推測の域を出ないが、側壁構築において奥半部と前半部の別が意識されていた可能性も考慮される。なお、石室外からは須恵器の壺蓋1点、壺身1点と甕が出土している。

坂下1号墳（図7、磐田市1979） 径約10mの円墳であり、約4.9×1.1mの横穴式石室を埋葬施設とする。床面は、奥部と中央部に礫床が検出されているが、空白域との境界は明確ではない。

耳環4点や玉類、刀装具、鉄鏃が出土しているが、石室内に散在した状態であり、埋葬主体の姿勢や副葬品配置の復元は困難である。土器は、石室中央奥寄りの左半部に須恵器の壺類11点と高壺1点、盃1点、平瓶2点、石室右前の閉塞石と接する位置に須恵器の壺が出土している。前者については、まとまった土器群

の副葬として把握できる。なお、石室外からは須恵器の壺類4点と高壺、躰2点、提瓶が出土している。

谷田4号墳（図7、磐田市1973） 径15mの円墳であり、約5.0×1.2mの横穴式石室を埋葬施設とする。床面は、全体に礫床が施されている。明確な区分とまではいえないが、奥から1.5～3mの範囲に大きめの礫の使用を把握することができる。

鉄刀や刀子、鉄鏃が出土しているが、石室内に散在した状態であり、埋葬主体の姿勢や副葬品配置の復元は困難である。石室前寄りの右側に須恵器の壺身、高

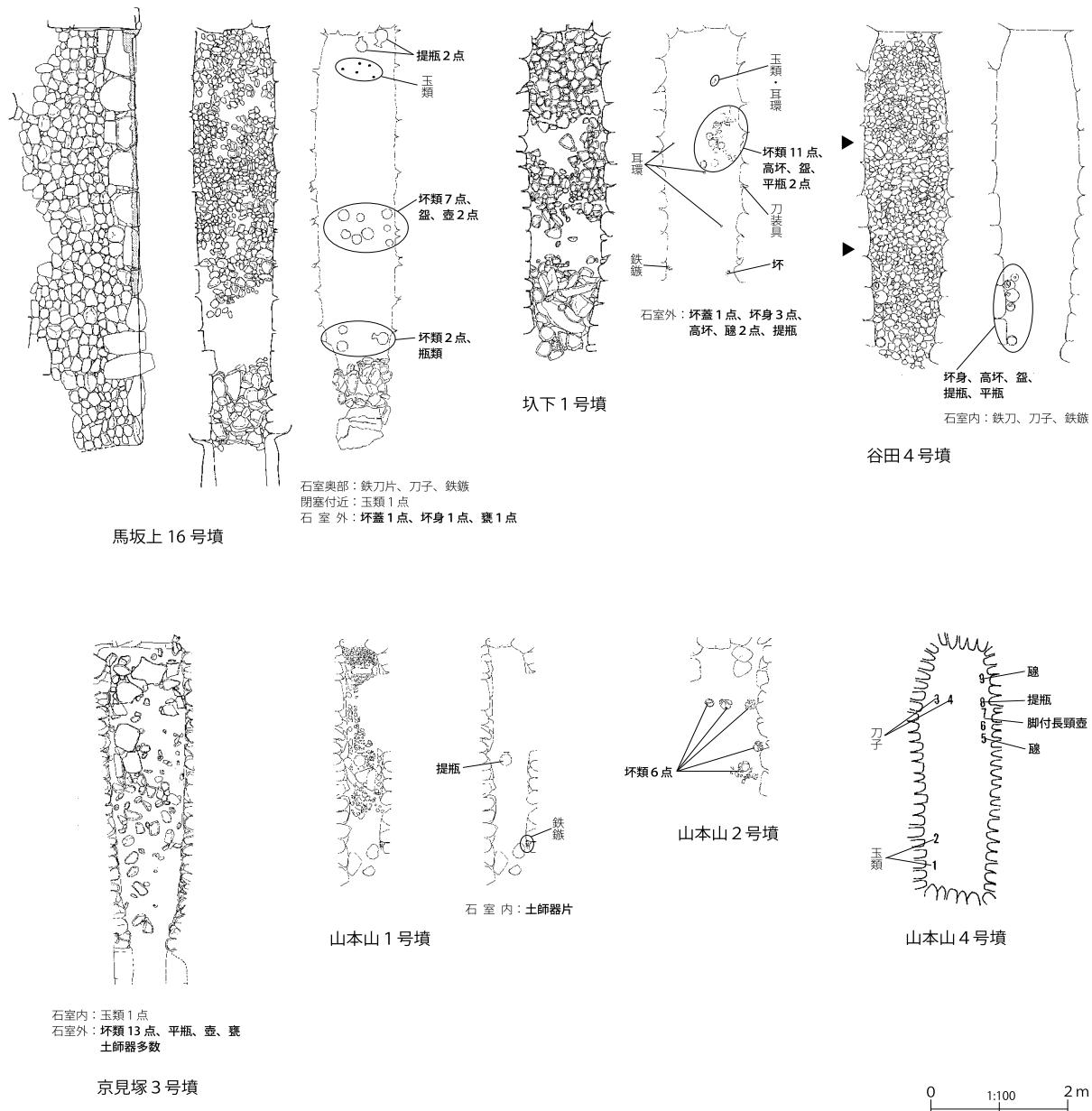


図7 各古墳の状況5

壺、盤、提瓶、平瓶が各1点検出されており、土器群の副葬を把握することができる。

京見塚3号墳（図7、磐田市2001） 径約12mの円墳であり、約4.5×1.1mの横穴式石室を埋葬施設とする。石室奥半部に板石敷きが検出されているが、残存の良い状態であるとはいはず、本来の板石敷きの範囲とは異なる可能性も考慮する必要がある。

副葬品の出土は勾玉1点だけである。石室外では、須恵器の壺類13点と平瓶、壺、甕のほか、多くの土師器も出土しているが、追葬以降のものが大半である。

オ 小笠山丘陵

山本山古墳群（図7、袋井市1978） 1号墳、2号墳、4号墳をあげることができる。1号墳は径約10mの円墳、その他の墳丘は不明である。

1号墳は、約3.5×0.5mの横穴式石室を埋葬施設とする。石室の奥から2.5mまでの範囲に礫床が施されている。礫床中央の長さ約1.7mの範囲において、埋葬主体の配置を推測させる石の並びが検出されており、その前端部には須恵器の提瓶1点が出土している。石室前端の左側には鉄鏃群が出土している。

2号墳は、石室の残りが悪い。礫床の検出はないが、須恵器の壺蓋3点と壺身3点が出土している。

4号墳は、約3.8×1.0mの横穴式石室を埋葬施設とする。石室奥寄りから刀子、前寄りから玉類が出土している。頭位を前に向けた埋葬主体の可能性が考慮されるが、それ以上の詳細を復元することは難しい。石室奥寄りの左側において、須恵器の甕2点、提瓶1点と脚付長頸壺1点が出土しており、土器群の副葬として把握することができる。

4 特徴と課題

遠江における6世紀代の無袖の横穴式石室について、主に床面の状況と副葬品等の出土状況について概観してきた。駿河東部において得た所見に沿って、埋葬等に関する状況を確認したい。

埋葬主体と副葬品の配置 人骨の残存が確認できる古墳はなく、副葬品も搅乱を受けている場合が多いため、埋葬主体や副葬品配置の詳細を復元できる古墳は非常に少ない。

山本山1号墳では、床面の礫の状況から石室奥寄りに埋葬主体を安置したことが把握できる。ただし、頭位は明確にできない。6世紀中葉以前の崇信寺10号墳では、刀剣の配置から石室奥寄りに頭位を奥に向か

埋葬主体を復元することができる。6世紀後葉以降の浦前III1号墳、瓦屋西B4号墳、上神増A5号墳、上神増E2号墳、社山1号墳、馬坂上16号墳においても、玉類や耳環、鉄刀の配置によって、奥半部に頭位を奥に向かた埋葬主体があった可能性が指摘できる。

一方、根本山A4号墳では礫床範囲の前寄りに耳環の出土があり、上神増E2号墳では石室前寄りの追葬面において、切先を奥に向かた鉄刀が出土している。また、崇信寺10号墳や山本山4号墳では、石室前寄りに玉類の分布がある。以上から、頭位を前に向けた場合も少数あったことが推測でき、石室前半部への追葬に多い可能性もうかがえる。なお、切先を奥に向かた刀剣の副葬については、静岡県内の後・終末期古墳例を田村2016aにおいて集成し、遠江にも少数存在することを確認している。無袖の横穴式石室に限らず頭位を前に向けた埋葬が一定数あったと推測できる。

以上を積極的に評価するならば、石室奥半部に頭位を奥にする埋葬主体が多い一方、追葬を中心に頭位を前に向ける場合もあった可能性を指摘することができる。この特徴は、駿河東部と大きく異なるものではない。ただし、玉類は儀礼的に用いる場合もあり、その分布のみで頭位の根拠とするには注意が必要である（富士市2016）。刀剣類などの配置が乱されている古墳も多いため、ここでは可能性を指摘するにとどめたい。

駿河東部の富士市中原4号墳などで認められた2人の被葬者が隣接する埋葬方法については、さらに検討できる古墳が少ない。浦前III1号墳などにその可能性を考えることができるが、断定は難しい。一方、縦列的な配置の可能性が指摘できる場合（上神増E2号墳など）もある。

土器の副葬 土器の副葬配置については、比較的良好に把握することができる。

石室奥部に配置する土器について、壺瓶類を主体とする傾向は駿河東部と同様である。また、石室前寄りの土器群については、須恵器の壺類を含む傾向が指摘できる。一方、駿河東部のように土師器の壺1～2点が特徴的に副葬されるという状況は認められない。

石室奥部の土器群が確認できた古墳は、天竜川以東に限られている。また、須恵器壺類を含む土器群について、天竜川以西では石室前端部に認められるが、天竜川以東の磐田原台地北部では壺類の副葬がほとんど認められず、一方で磐田原台地中南部では石室中央部に確認できる場合がある。残存状態の影響も考慮する必要があるが、土器群の副葬に関する地域的な違いを

指摘することもできる。

床面構造との関係 床面については、礫床を施す場合が多く認められるが、天竜川以東の一部には板石敷きがある。また、前寄り1m前後を空ける場合が中平古墳群や根本山古墳群、大手内A古墳群において特徴的に確認することができ、小地域や古墳群単位の展開を指摘することができる。

一方、礫床内の区分については、礫の大きさの違いが認められる場合が少數あるが、それぞれ単発的なものとして把握することができる。すなわち、駿河東部において広く認められたような、奥寄り2~3mを区画する造作は普及していないようである。先述のとおり、埋葬主体や土器の配置には駿河東部との共通点も指摘できるが、その空間区分の表示は明瞭ではなかつたといえる。

土器の副葬について、磐田原台地中南部に認められた石室中央への壺類主体の土器群の配置は、この空間区分の不明瞭さと関係している可能性も考えられる。すなわち、横穴式石室の空間区分のあり方と埋葬等の諸行為は関連し、もしくは影響し合いながら、地域的傾向をもって普及、展開している状況を示していると評価することもできる。

5まとめ

駿河東部における検討に続けて、遠江の無袖の横穴式石室について埋葬等の利用状況と石室空間の区分に関する特徴を検討した。残存状態の良い資料が少ないなか、ある程度の特徴を確認し、駿河東部との比較によって注目できる点を抽出することもできた。他の形態の横穴系埋葬施設についても確認し、より確実で具体的な評価につなげていきたい。

註

- 1 時期については、田辺1966・1981や鈴木敏2004などを参考にして、陶邑編年MT15型式併行期を6世紀前葉、陶邑編年TK10型式併行期を6世紀中葉、TK43型式併行期を6世紀後葉、陶邑編年TK209型式併行期の古相を6世紀末葉頃、同新相を7世紀前葉に概ねあたるものとする。
- 2 埋葬された被葬者そのものを「埋葬主体」と呼称する。また、石室の方向については、奥壁側を「奥」、出入口側を「前」とし、「左」と「右」については、奥から前を見たときの方向とする。
- 3 石室規模の記載は、内法の全長と最大幅による。全長は主に側壁によって測り、閉塞石の範囲は考慮していない。一方、幅狭短小の入口構造（天井のない石積み入口

構造）と判断される部分は含まない。

引用・参考文献

- 磐田市教育委員会 1973 『磐田市竹之内原古墳群調査記録報告』
磐田市教育委員会 1979 『磐田市坂下古墳群第1号墳発掘調査報告書』
磐田市教育委員会 1998 『馬坂 馬坂遺跡・馬坂上古墳群発掘調査報告書』
磐田市教育委員会 2001 『京見塚古墳群発掘調査報告書』
湖西市教育委員会 1983 『天神山古墳群発掘調査報告書』
静岡県教育委員会 1968 『東名高速道路（静岡県内工事）関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
静岡県考古学会 2000 『東海の横穴墓』
静岡県考古学会 2003 『静岡県の横穴式石室』
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010 『合代島丘陵の古墳群』
鈴木一有 2000 『遠江における横穴式石室の系譜』『浜松市博物館報』第13号 浜松市博物館
鈴木敏則 1988 『遠江の横穴式石室』『転機』2号
鈴木敏則 2004 『有玉古窯』 浜松市教育委員会
田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群I』 平安学園考古クラブ
田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
田村隆太郎 2010 『遠江』土生田純之編『東日本の無袖横穴式石室』雄山閣
田村隆太郎 2016a 『中原4号墳の埋葬と儀礼』『伝法 中原古墳群』富士市教育委員会
田村隆太郎 2016b 『駿河東部の横穴式石室と埋葬に関する検討』『研究紀要』第5号 静岡県埋蔵文化財センター
豊岡村教育委員会 1983 『押越・社山古墳群調査報告書』
豊岡村教育委員会 2000 『大手内古墳群』
土生田純之編 2010 『東日本の無袖横穴式石室』雄山閣
浜北市教育委員会 2000 『内野古墳群』
浜松市教育委員会 1982 『西鴨江 中平遺跡』
浜松市教育委員会 1988 『浜松市半田山古墳群（IV中支群 - 浜松医科大学内 - ）』
浜松市教育委員会 1991 『瓦屋西古墳群』
浜松市文化協会 1988 『根本山古墳群II』
浜松市文化協会 1991 『有玉西土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』上巻
浜松市文化協会 1992a 『佐鳴湖西岸遺跡群』
浜松市文化協会 1992b 『有玉西土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』下巻
富士市教育委員会 2016 『伝法 中原古墳群』
森町教育委員会 1996 『静岡県森町 飯田の遺跡』
袋井市教育委員会 1987 『大門大塚古墳』
袋井市教育委員会 1978 『山本山古墳群』

図の出典

- 図1 富士市2016および田村2016bを使用
- 図2 静岡県考2000・2003より作成
- 図3 天神山3号墳は湖西市1983、辺田平12号墳は浜北市2000、上神増E7・10号墳は静岡県埋2010、崇信寺10

号墳は森町1996、大門大塚古墳は袋井市1987を使用

図4 根本山A 4号墳は静岡県教1968、根本山E 3号墳は浜松市文1988、中平6・7号墳は浜松市教1982、浦前III 1号墳は浜松市文1992aを使用

図5 地蔵平A・B古墳群は浜松市文1992b、瓦屋西B 4号墳は浜松市教1991、瓦屋西C 6号墳は浜松市文1991、半田山D古墳群は浜松市教1988を使用

図6 上神増A 5号墳・E 2号墳は静岡県埋2010、社山1号墳は豊岡村1983、大手内A古墳群は豊岡村2000を使用

図7 馬坂上16号墳は磐田市1998、杣下1号墳は磐田市1979、谷田4号墳は磐田市1973、京見塚3号墳は磐田市2001、山本山古墳群は1978を使用